

ぶんこだより

子どもたちと、もっともっと絵本を楽しんでもらいたいから…

「ロバート・マックロスキー」

9 SEP
2026

ずいぶん前のことですが、岩波書店の雑誌「図書」に、ロバート・マックロスキーのことが紹介されていました。紹介しているのが誰で、内容のことも詳しくは覚えていませんが、ただ絵本「かもさんおとおり」の作者、ロバート・マックロスキーが、かもたちを描くのに、部屋のおふろで、かもを飼っていた、そんなことが紹介されていました。

「かもさんおとおり」（作・画：ロバート・マックロスキー、訳：渡辺茂男／福音館書店、1985年）は、「かものマラードさんと マラードおくさんは、すをつくるばしょを さがしていました」で始まり、なんとかその場所を見つけ、「…すのなかに たまごを ハつうんで」「あるひ、たまごがわれて、こがもたちが うまれました。」そのこがもたちを育てる物語が「かもさんおとおり」です。

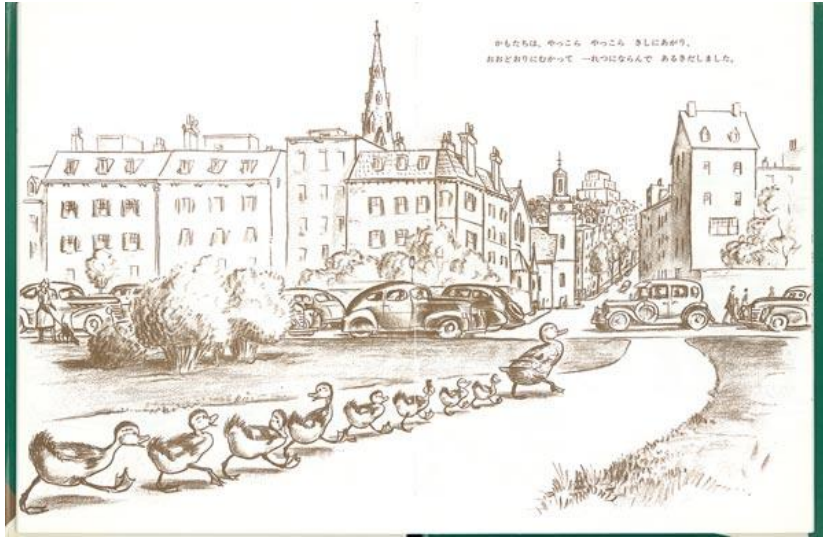


たとえば、その「あるひ、たまごがわれて、こがもたちが うまれました」のことを描き、見開きいっぱいに、うまれたてのこがもたちと、マラードさんと、マラードおくさんが描かれています。

ただ、そのページの「うまれたて」のこがもたちは、幼くて小さくて、ほとんど見分けが付きません。

「泳ぐ」ことを教え始めた時のこがもたちは、陸からおっかなびつくりで、マラードさんを見つめるだけです。ところが、泳ぐことを覚え始めたこがもたちは、もう同じ様子ではありません。表情も動作の一つ一つも別のこがもとして描かれています。

マラードおくさんを追っかけるようにして歩くこがもたちも、もちろん同じではありません。たぶん、こがもという普通に誰が見ても同じに見える生きものを、マックロスキーは、決して同じには描かなかったのです。描きたかったのは同じではない「別のこがも」でした。



この絵本を「読み聞かせ」してもらう子どもたちに、絵本とは言え、いいえ子どもたちの絵本だからこそ、本物の生きものの姿を見せたかった、たぶん、そんな思いが同じであって、同じではない、こがもたちになったに違いありません。

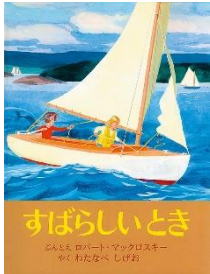
そう言えば、表紙の見開きには、「あるひ、たまごがわれて、こがもたちが うまれました」となっている、たまごが割れて、生まれたこがもが歩き始める様子の一つ一つが描かれています。「誕生」の驚きというか不思議を、さり気なく伝える大切なページなのだと思います。

そうして生まれ、そうして育つこがもたちの「大移動」が始まります。その時の欠くことのできない働きをするのが、マラードさんとマラードおくさんを、飛来と巣作りから見守ってきた、「マイケルさん」というおまわりさんです。

そのマイケルさんの描かれる姿は「大きく」見開きいっぱい描かれています。たとえば、かもたちの一家の移動で、大きな大きな働きをするのですから、誰が見ても大きいということは大切なのです。

「かもさんおとおり」は、そこそこ長い物語です。でも、この長い物語が、最初からおしまいまで、子どもたちを「魅了」して止まないのは、そのように描けば子どもたちが、かもたちが描かれるこの絵本を、必ず喜んで欲しいと願い、それが実現していること、その喜びは、マックロスキー自身のものでもあるからです。

自然の小さな小さな営み、それが大きな大きな力を誇示することもあること、広い広い世界のそのものでありかつその一部であること、自然には遠い遠い昔からの歴史の営みのあること、今を生きる「私たち」は、その歴史のつながりを生きていること、そして、そこに一人ではなく、人々として生きていることを、ゆっくり、広く、深く



描いているのが、マックロスキーの「すばらしいとき」(文・画：ロバート・マックロスキー、訳：渡辺茂男／福音館書店、1978年)です。

「すばらしいとき」は、いつか、どこかにある特別な場所や時間ではなく、一分一分、一時間一時間、一日一日が、身を置いて生きている、その場所の、その時間であることを、「おまえたち」と呼ばれる、2人の子どもたちを軸にして描く絵本です。

今年は、アメリカ建国 250 年だそうです。「すばらしいとき」の嵐の後の次の日、「おまえたちは、たおれた木の根がのこした　ぎざぎざの穴に　はいりこむ。家のそばの　古い木の下に、おまえたちは、インディアンの貝塚をみつける。何千という、ゆきのように白い　はまぐりの貝がらを　つつくうちに——」。「すばらしいとき」は、その過去の歴史、インディアンの貝塚、インディアンの歴史の「発見」も、それとなく描くのを忘れません。(「だがそれは、1492 年から始まったヨーロッパによるアメリカ南北大陸の植民地化のうち最初のわずかおよそ 150 年間で、先住民族が軍事的征服、奴隷化、追放により、まだ免疫をもっていなかったヨーロッパ由来の病原菌により、大量の死者を出して滅ぼされてしまったと考えられる事実を、無視すればの話だ」 引用、「世界が眠っているあいだに　パレスチナの物語、言葉、傷」、(著：フランチェスカ・アルバネーゼ、訳：原口昇平／地平社、2026年8月)。



瀬田貞二が、マックロスキーについて書いた、短い文章があります。「私は子ども絵本の傑作をものにしよう、古典に仕立てようというつもりはありませんでした。音楽家は自分の音楽を聴いてもらう喜び、建築家は住む家を建てるのを好むものです。私も、私の絵本をながめてもらって楽しめたらいいと思うのです」(「絵本論 瀬田貞二 子どもの本評論集」(著：瀬田貞二／福音館書店、1985年)。

なんのなんの、「ながめてもらって楽しめたらいい」などと軽く言っていますが、たとえば部屋で、浴槽で、「かも」と付き合ったりするマックロスキーの「徹底的な追及力」が、子どもたちの「楽しい」になっているのです。





絵本とともに

～絵本とともに、子どもと歩む日々～

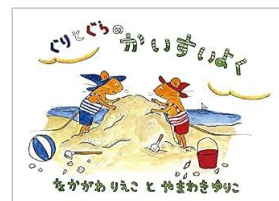
8月のある日のこうどうぶんこでは、「海」をテーマに2冊の絵本を読ませていただきました。

1冊目は、「うさこちゃんとうみ」（ぶん、え：ディック・ブルーナ、訳：石井桃子／福音館書店、1964年）です。うさこちゃんとうさこちゃんのおとうさんは、海に出かけます。おとうさんの問いかけにうさこちゃんが答えながら、海に出かけるのです。

「うみにいきたいひとだあれ？」「おおきなすなやまができるかな？」何でもない会話の様ですが「お父さんと海に行く」という、特別なお出かけの日の楽しかった様子が、ぎゅっと詰まっているお話です。



2冊目は「ぐりとぐらのかいすいよく」（著：なががわりえこ、画：やまわきゆりこ／福音館書店、1977年）です。偶然なのですが、この絵本を息子に読み聞かせた翌日にプールに行きました。「これ、うみぼうずおよぎ。」「次は、イルカジャンプね。」と、お話の中に出てくる泳ぎ方を次々と...今回は、絵



本から影響を受けた様子がストレートに伝わってきましたが、絵本を子どもたちに読み聞かせていてときどき思うことがあります。お話を聞いて、面白かった、楽しかった、びっくりした、悲しかった...いろいろな気持ちが、心の中の小さな引き出しにしまわれていって、その一つひとつが将来の応援団となりますように！っと。（もちろん子どもたちには、気楽にお話を聞いてほしいのです。）

「かもさんおとおり」

（作・画：ロバート・マックロスキー、訳：渡辺茂男／福音館書店、1965年）

「すばらしいとき」（文・画：ロバート・マックロスキー、訳：渡辺茂男／福音館書店、1978年）の著者紹介の欄にこんな文章がありました。「仕事場への往き来で通るパブリック・ガーデンで、たのしそうにあそぶかもの群れをながめ、ある日実際にか



もの親子の行列が、道路で自動車の流れをとめるのを見て、『かもさんおとおり』の物語が生まれたのだという。」マックロスキーが実際に、かもの親子の行列を見て、この「かもさんおとおり」が誕生したのです。何という想像力でしょう！絵本では、その道路を通らなければならない、かも側の事情や、かもの親子が道路を渡れるように自動車をとめてやる優しいお巡りさんや、かもの親子をほほえましく見守る街の人たちの様子が、丁寧に描写されています。

そして、感心してしまうのは、マラードおくさん（子がもたちのお母さん）がしっかりと子育てをしていることです。泳ぎ方、潜り方、一列に並んで歩くこと、呼ばれたらすぐ来ること、車や自転車には近寄ってはいけないこと...こんながんばりやのマラードおくさんだからこそ、おまわりさんや街の人たちは力を貸したくなったのかもかもしれませんね。

セピア一色の柔らかなコンテで描かれた絵本ですが、マックロスキーの、確かで、豊かな画力が伝わってきます。ボストンの古き良き街並みを、大型絵本でお楽しみください！

「ジョニーのかたやきパン」

（作：ルース・ソーヤー、画：ロバート・マックロスキー、訳：こみや ゆう
／岩波書店、2009 年）



まるで、ミュージカルを観ているかのような一冊です。なぜかと言うと…。

①ころころ転がるかたやきパンとともに、とてもテンポよくお話が進んで行くからです。

②おばあさんも、おじいさんも、そして、かたやきパンも！次々に歌を披露するからです。かたやきパンの歌はこんな感じです。「おいら

は ころがる かたやきパン！ ころがる おいらを つかまえて、たべられるもん
なら 食べてごらん！」

③マックロスキーの躍動感のある絵を見ていると「かたやきパン待って～」と追いかけたくなるからです。

ぜひ、テンポよく読んで、楽しんでみて下さいね！

今月のつくって!あそぼう!

スイートポテトパンプキン

【材料】

- ・ かぼちゃ 300g
- ・ 砂糖 大さじ2
- ・ バター 20g
- ・ 卵黄 1個分
- ・ 黒ごま 適量

ポリ袋でかんとん♪
スイートパンプキン



【つくり方】



- ①かぼちゃの種とワタを取り除き、アイラップに入れ、耐熱皿にのせて1分チンする。



- ②かぼちゃを取り出して、皮をむき小さく切る。



- ③切ったかぼちゃをアイラップに戻し、袋の口をくるくる巻く。
耐熱皿にのせて電子レンジでチン。
*袋の口は結ばない！



- ④熱いうちにバターと砂糖を入れ、麺棒でやさしく叩いたり、手でよくもんで、滑らかになるまで潰す。 *熱いので注意してね！



- ⑤形成して、表面に卵黄をぬり、黒ごまをまぶす。



- ⑥トースターやオーブンで、焼き色がつくまで焼く。

今月のわらべうた

♪ここは てつくび

ここは

てつくび

てのひら

ありやりやに

こりやりや

せいたかぼうずに

医者ぼうず

お酒わかしの

かんたろうさん



「おはなしのろうそく26」(東京子ども図書館編)より

♪うさぎ うさぎ

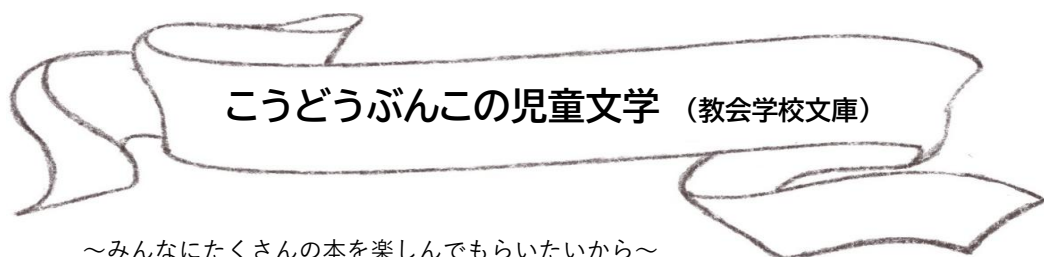
うさぎ うさぎ

なぜみみ なげ？

やまのことも ききてし

さとのことも ききてし

それでみみ なげ！



「詩のころを読む」

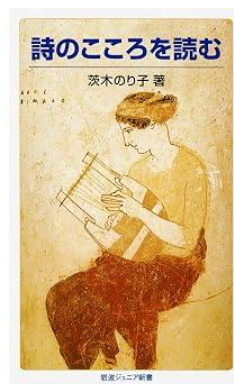
若い人たちに（若い人たちとは限らず…）、「詩」を読んでほしい。「詩」と出会ってほしい願いで書かれているのが、「**詩のころを読む**」（著：茨木のり子／岩波書店、1979年）です。

それは、茨木のり子が、自分でも詩を読み、詩を書いてきた歩みで出会い、立ち止まって、考え方、生き方を揺さぶられた体験、その時の一つ一つの紹介としても書かれています。難しく言えば、「詩論」にもなりますが、詩と言うものに出会って、自分の生き方、言葉の世界、人や自然とも出合いの自分にはない発見、それらのことが、出会った一つ一つの詩から考察されている。そんな意味で、「詩論」だと言えなくはありません。

とは言え、その記述は、誰かの詩の一つの言葉、一つの表現、一つの思考との出会いという意味で、とっても具体的で、一つ一つにハッとさせられる。それが「詩のころを読む」なのです。

例えば、石垣りんの「くらし」に触れながら、こんなことが書かれています。

『くらし』が生きものの持つあさましさをテーマにしなが、読み終えたあと一種



の爽快さに浸れるのはなぜか。おそらく、この詩の中に浄化装置がしこまれていて、読み手がここを通過するさい、清められて、思いもかけない方向へ送り出されるからだとおもいます」と書いて更に、「浄化作用（カタルシス）を与えてくれるか、くれな
いか、そこが芸術か否かの分かれ目なのです」と書いています。

「会わずには生きてゆけない」で始まる石垣りんの「くらし」は、「…台所に散らばっている にんじんのしっぽ」を経て、「私の目にはじめてあふれる「獣の涙」で閉じられます。「作者の涙は、読むものの涙へ、繋がってしまい、優れた浄化作用を果たしています。それが茨木のり子の詩であり、だからこそ、『詩』を読んでほしい。『詩』に出会ってほしい」のです。

「詩のころを読む」は、その全体で幅広い、そして深い、そして多様な人間、人間の生き方にも出会えることを、少なからずの、自分の詩との出会いを通して、紹介しています。

その茨木のり子は、「自分の感受性くらい自分で守れ」「寄りかからず」などで、詩との出会い、世界を広げる仕事をしてきました。

くらし

石垣 りん

食わずには生きてゆけない。
メシを
野菜を
肉を
空気を
光を
水を
親を
きょうだいを
師を
金もころも
食わずには生きてこられなかった。
ふくれた腹をかかえ
口をぬぐえば
台所に散らばっている
にんじんのしっぽ
鳥の骨
父のはらわた
四十の日暮れ
私の目にはじめてあふれる獣（けもの）の涙。

こうどうぶんこ によろこ

「こうどうぶんこ」は、およそ 50 年前、石井桃子の「子どもの図書館」
(著：石井桃子／岩波書店、1965 年) に促されるように、教会礼拝堂の隅
っこに 2 本の本棚に絵本を並べて始めました。

始めてみて、何よりも驚いたのは、読み聞かせする大人と絵本に、いわば
「我を忘れて」向かってくることでした。子どもは、絵本・本が大好きなの
です。

「こうどうぶんこ」は、「絵本・本好き」の子どもたちの力で続いてきました。

「こうどうぶんこ」によろこ！

「こうどうぶんこ」は、集まってくる子どもたちの絵本と児童文学の「お部屋」です。



1、会員になってください

「こうどうぶんこ」の会員になってください。登録だけで、入会金・会費は不要です。2025 年
より毎週水曜日（不定期で、お休みの時もあります）。

借りるのも、返すのも、午後 3 時～4 時 45 分まで。

2、ぶんこの部屋

「こうどうぶんこ」は、絵本の貸し出し（読み聞かせ）、朗読、わらべうた（マザーグース）、な
ぞなど、言葉であそぶ時間です。

3、1 度に借りられる冊数

1 人につき 5 冊まで。

4、貸出期間

2 週間

5、利用登録

本を借りられる方は、お名前、住所、連絡先などの登録をしてください。

6、お問合せ

〒662-0834 西宮市南昭和町 10-22

西宮公同幼稚園内 こうどうぶんこ

TEL : 0798-67-4691

FAX : 0798-63-4044

MAIL : koudou@gamma.ocn.ne.jp



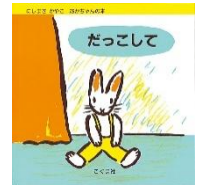


こうどうぶんこ



日時：毎週水曜日 15 時～16 時 45 分

場所：ぶんこの部屋（西宮公同教会付属 西宮公同幼稚園）



October 10 2026						
日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12 スポーツの日	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

November 11 2026						
日	月	火	水	木	金	土
1	2	3 文化の日	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23 勤労感謝の日	24	25	26	27	28
29	30					

編集後記

私たちが編集・発行しています。ご意見や感想、お聞きたいことがありましたらお声かけください。

菅澤・濱・田場・金澤